

全国学力調査問題の検討 2

2018年 小学・国語A 4の検討

加藤郁夫（読み研運営委員）

物語の情景描写表現を取り上げた問題である。

はじめに述べておきたいのは、著作権の問題と思われるのだが、PDFにも示したように、引用された物語の原文の部分が白紙になっていることだ。これをみる限り、どのような問題なのかを検討することができない。新聞に掲載された時点では、原文も示されているのだが、ネット上では見ることはできない。問題の可否も含めて検討をしようとしても、問題を見ることができなくてはどうしようもない。全国学力調査という日本の子どもたち全体に関わるものであり、誰もが問題を見ることのできる状態にしてほしいと思う。

それでは、問題の検討に入ろう。情景描写の一文を取り上げ、それが「特に心に残った」「理由として最も適切だと考えられるもの」を4つの選択肢から選ぶ問題である。傍線が引かれた情景描写の一文を以下に示す。

草がそよぎをとめ、草の穂波の向うに沈む夕日が、あたり一面を火の海にしている。

選択肢を検討していこう。この文には、登場人物のことは何も述べられていないから、「1 登場人物の行動から～」は答えから除外される。さらに「4 登場人物の会話から～」も同様に除外できる。また、音を表す表現もないことから「3 音を表す表現から～」も除外できる。

したがって、答えは「2 景色や様子を表す表現から、コウタのいかりやくやしさが伝わってくるから。」が正解となる。

一見、特に問題があるようには見えない。

まず気になるのは、選択肢「1」「3」「4」の前半の部分だけを読むことで、その可否が検討できてしまうことである。「登場人物」のことを述べていない、「音」を表していないということで、「1」「3」「4」が間違いと分かる。A問題だから、わかりやすくしたといえればそれまでだが、あまりに安易すぎないだろうか。もう少し述べると、本問題ではあらすじや示されている原文全体を読まなくても、問題になっている一文と選択肢を読むだけで正解にたどり着ける。

次に、正解「2」の後半「コウタのいかりやくやしさが伝わってくるから」は、傍線部の箇所から読めることなのだろうか。中西さんの「心に残った」理由なのだから、中西さんがそのように思ったのだと言ってしまえばいえなくはないが、それでは国語の問題としては成立しない。誰もがそこに納得できる理由が見いだせる必要がある。

「物語のこれまでのあらすじ」が次のように示されている。

五年生の夏休みの終わりに、コウタは、カクロウをふくめた塾の仲間と花火大会を計画していた。お金を出し合って買った花火は、コウタの家の物置に入れていた。しかし、その花火は計画の当日にコウタの母親に見つかり、水につけられてしまう。コウタは、そのことをカクロウに伝え、カクロウと自転車で仲間のもとに向かい、報告する。そこでコウタは仲間の一人に厳しくせめられてしまう。

引用されている箇所は、コウタがカクロウと別れ、一人で歩いていく場面である。このあらすじから

でも、ある程度「コウタのいかりやくやしき」は推測できる。

それでは肝心の「草がそよぎをとめ、草の穂波の向うに沈む夕日が、あたり一面を火の海にしている」の一文から、「コウタのいかりやくやしき」が読み取れるだろうか。

情景描写とは、単に景色やその場の様子を述べたものではない。景色の描写に登場人物の心情を重ね合わせた表現が情景描写である。

たとえば、芥川龍之介の「トロッコ」で見てみよう。次の場面は、押したくてたまらなかったトロッコを押させてもらって喜ぶ良平が描かれている。

そのうちに線路の勾配は、だんだん楽になり始めた。「もう押さなくともいい。」——良平は今にも言われるかと内心気がかりでならなかった。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起こしたぎり、黙々と車を押し続けていた。良平はとうとうこらえきれずに、おずおずこんなことを尋ねてみた。

「いつまでも押していていい？」

「いいとも。」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ。」と思った。

五六町余り押し続けたら、線路はもう一度急勾配になった。そこには両側のみかん畑に、黄色い実が幾つも日を受けている。

下線部自体は、景色の描写である。しかし、それを見ている良平の視点から読むことで、その明るい景色が良平のうれしさと重なり、良平の明るい心情の表現となっていく。

その景色や様子を見ている人物の心情と重ね合わされることで、情景描写になるのである。それまでの人物の心情に対する一定の理解がないと、情景描写を読み解くことはできない。問題となった箇所も、コウタの目に写ったあたりの様子として語られている。特に、「あたり一面を火の海にしている」という表現が、コウタの心情に繋がる。

しかし、「あたり一面を火の海にしている」から、即「いかり」「くやしき」が出てくるかと言えばそうではない。客観的には、夕日で草原が赤く染まっているというだけである。それをコウタは「火の海」と見ている。「火の海」という穏やかではない言葉から、コウタの心の中が穏やかではない状態が読みとれる。しかし、それを「いかり」「くやしき」と言い切つてよいのかどうかは、そう単純な問題ではない。否定的な感情とは言えても、「いかり」「くやしき」と断定できる根拠はこの一文にはない。あらずじから、

母親に花火を見つかり、水につけられてしまったこと

仲間の一人に厳しくせめられたこと

がわかる。それらの状況から、「いかり」「くよしき」に近い感情という推定はできる。しかし、「いかり」「くよしき」と断定できる証拠はない。

つまりこの問題は、問題文の箇所をきちんと読み取ることから正解が導き出されるのではなく、問題文にはないことから、誤りの選択肢が選出され、結果として「正解」に至るものである。選択肢「1」「3」「4」が間違いだから、「2」が答えという、非常に消極的な正解の問題になっているのである。

「草がそよぎをとめ、草の穂波の向うに沈む夕日が、あたり一面を火の海にしている」という一文から直接「いかり」「くよしき」という心情が読みとれるのではない。しかし、本問題はそれが読み取れるかのような誤解を与えてしまう。

国語科はともすれば論理的ではなく、感情的・感覚的な教科であるかのような印象を持たれてしまう。その一因に文学作品における心情の読み取りがあると私は考えている。不必要に、あるいは大した根拠を持たずに、人物の心情を考えさせる読解指導が、子どもたちにとって国語の勉強をわかりにくいもの

にしている。本問題は、そのような国語科に対する誤解に与する危険性を持ったものといえる。

情景描写を問題として取り上げるのであれば、なぜ景色の描写から登場人物の心情が読み取れるのか、そのプロセスを考えさせるような問題が望ましいと考える。